

新しい授業づくりの文化を創る

令和4年6月30日「能力ベースの授業づくり実践講座」授業研究会

第5号

授業者は 教材研究会の学びから どう単元を描いたのか

授業者：船橋 壮 教諭

学校：吹田市立第二中学校

学年：第2学年

領域：陸上競技「走り高跳び」



<授業を見る視点>

子供たちは、合理的な解決に取り組めていたのか。

これによって、子供がどう思考したのか。

そして、実感として価値づいたのか。

【授業者の言葉より】

5月30日の教材研究会で、子供の成長実感を支える学び、授業を描いていくという視点が大事だということが、自分の中に深く残っています。

今までの授業を振り返ってみると、そういうことは考えていたものの明確ではなく、「最後に簡単にまとめて」という授業だったなと考えています。今回は、何ができるようになったのかということを書くとか、動画で見るとか、そういう「明示的指導」というところは、もっともっと意識してやっていきたいと思っています。そのために、教師自身が『なぜこの単元をするのか』『この単元で何を学ばせるのか』を明確にしておくことが、非常に大切であると考えています。

成長の軸を支える手立てとしての言語化、その2つの柱として「可視化」と「対話」を意識して、本時を描きました。対話に関しては、私と生徒の対話を通して思考を焦点化し、今日は何をすべきなのか理解させようと思っています。可視化に関しても、動画を見るように声をかけるようにして、教材研究会でご意見をいただいたとおり、自分がイメージしている動きと自分が実際にしている動きとの差について意識させることで、子供たちの見方も少しずつ変わってきていると感じています。

合理的な解決を目指すプロセスにおいて 生徒は何ができるようになったか

【実際の授業より】

船橋先生の明示的指導「合理的に解決する学習プロセス」を確認

- ① 自分の課題を見つける。
- ② それに対して、知識の活用をしていく。
- ③ 知識を活用して練習し、実際どうだったか振り返る。
- ④ 仲間と協力する。協働。
- ⑤ これまでに学んだこと、得たことを、次につないでいく。特にこの時間では、自分の課題に対して、ワンページポートフォリオを確認したり、友達に聞いたりしてもいいので、とにかく持っている知識を使う。使うことで、例えば、アドバイスに変える。そういうところを今日は学ぶ。もう一つ大事なものは、「自分の動きってどうなっているのかな」ということは確認したい。その部分の振り返りをどうやっていくかについては、君たちに投げかけておくので、その辺は工夫してほしい。

P 課題(問い)をもつ

『個別最適な学び』

D 試行する 知識を活用する

『協働的な学び』

C 振り返る

クリティカルシンキング

A 改善策を試行する

成長実感!!

<子供の具体的な言葉>

「足の裏で力強く踏み切ろう」

「動きのポイントがわかるから、テキストを参考にしている。」

「(動画を見ながら)ここを意識したい。」(友達と共有しながら)

「踏み切りではなく、流れのようになる。」(自分の跳び方について)

「跳ぶ直前に体重を後ろにかけて跳んだらいい。」

「V T Rを比べると、以前跳んだ時と今とでは、全然違う。」



船橋先生の明示的指導「プロセス」の価値の確認

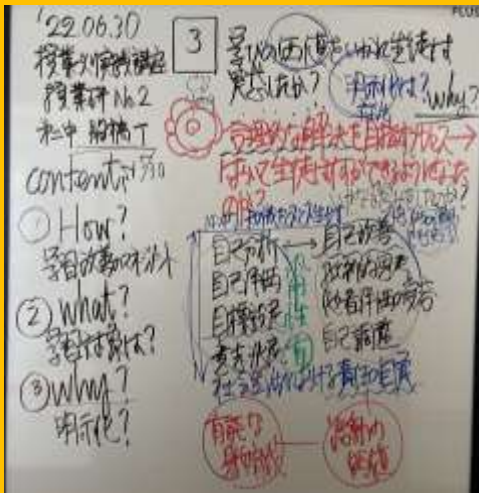
今日やってきたことは、課題を自分たちで見つけて、それについて知識を活用すること。あとは振り返りをしてみようということ。みんなは動画を撮りながら、中にはスローで撮るなどの工夫をしながら、「本当にこの助走でいいんだろうか」とか、「もうちょっと足を伸ばした方がいいんじゃないか」とか考えていた。こういう姿からも、知識を身に付けていることは分かる。だからこれを今度は仲間と協力して活動している時に使えたかどうか。「足のここを伸ばさなあかん。」とアドバイスをしたとしても、「ここってどこ?」と、聞いている人は思うかもしれない。足といってもリード足もあるし、抜き足もある。それがどっちの足かということを知覚して言葉にできるという。

今日は、自分の課題に対して解決に向かっていく活動をした。単元の初めは、高く跳べることが凄いというだけの見方だったのが、知識を使って自分の課題が見つかったり、友達と関わったりできるようになって、どうすれば高く跳べるのかと考えられるようになってきた。ラスト2歩のリズムアップとか、かかとから足裏へ、という知識は、高跳びを行ううえではすごく大事だが、それだけを覚えていても次につなげにくい。どうすれば自分の課題を解決できるのかという考え方を持っておくと、例えば水泳でも、跳び箱でも活用できる。だから、そういった考え方を身に付けてほしい。

齊藤先生による全体指導

WHY WHAT HOW 3つの視点から単元を描く

WHYの視点



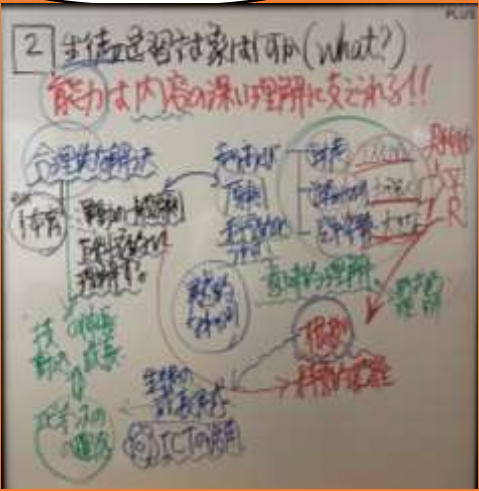
□学びの価値をいかに生徒は実感したか？

合理的な解決を目指すプロセス(How)において、生徒は何ができるようになったのか。いかなる営みをしたのか。それがWhy?となる。

価値の明確化が重要。つまり、合理的な解決という学習をやっている価値を子供が実感することが大切。こういう学習が大事だと思えることで、生涯体育につながっていく。2m跳べなくてもいい。気持ちよく跳べた、何となく綺麗な形で跳べたという実感が、自分が好きな水泳やマラソンに反映されたり、この後の体育で活かされたりする。合理的な解決のプロセスが大事ということ、今回の授業でも最後の明示的指導でたまたみかけた。

合理的な解決という営みというのは、ただ体育の理にかなった解決をすればいいだけではなく、本当にそれで大丈夫かと自分自身の営みを見つめ直すことが大切。合理的な解決を目指す際に、今日の授業では、自己分析、自己評価、目標設定、意思決定の往還が見られた。その中で、クリティカル・シンキングが繰り返され、友達といろいろなことを伝え合う姿が見られた。

WHATの視点



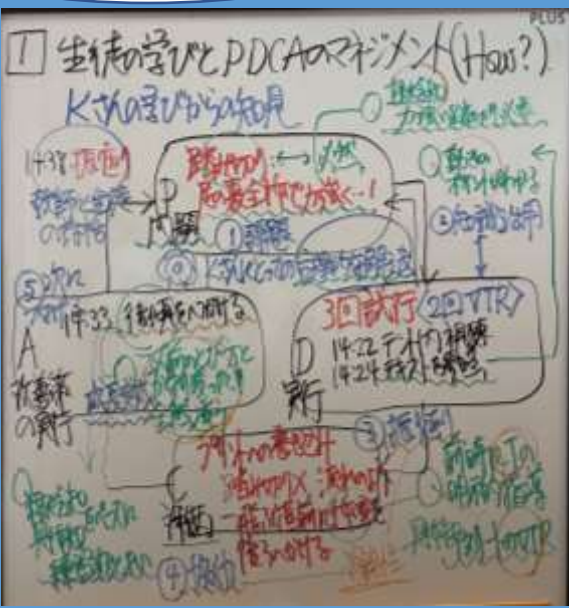
□生徒の学習対象は何か(What?)

今日の能力を一言で言えば、物事を合理的に解決できる力である。能力としての合理的な解決は、汎用性の高い能力である。体育にとっては、運動の一般原則を科学的に理解すること。アスリートも科学的な分析をしている。そういった経験の入口である。

今日の授業では、走り高跳びの原則を、科学的につかんでいるかどうか。助走、踏み切り、空中姿勢と、運動を3つの局面に分けて科学的に分析し、それぞれ、「リズムカル」「力強く」「大きな」と抽象的な表現で表したが、これを1歩進めるために、具体知を用意した。それがVTRである。これによって、例えば、リズムカルがどんなものかを具体知で表現することができた。

合理的な解決ができる子供は、内容を深く理解できており、科学的につかんでいる。VTRは、具体知であることから、内容の深い理解、つまり意味的理解につながる。今日のようなICTの使い方は、教科の確信をつけており、生徒の成長実感の根拠となる。このように自分の成長を確かめる手段をもっておくことは大切であり、ICTの有効活用が期待される。

HOWの視点



□生徒の学びとPDCAのマネジメント(How?)

今日の授業で1番大切なAさんにとっての合理的な解決について考える。PDCAのCの局面で、プリントに「跳ぶ直前に体重を後ろへかける」と書いてから、かなり意識して、後傾で踏み切れるようになった。授業が終わってから「この授業でどんなことを感じたの?」と聞くと、「改めて初めに確認したポイントを踏まえて、練習していこうと思う」と答えており、概念知と具体知の両方を参考にして練習をすると、うまく改善していくことを理解した様子であった。これが、理にかなった解決である。<合理的解決>

つまり、学び方を、学習改善、行動改善のプロセスを学んでいる。何でもいから我流でやればなんとかなるのではなく、理にかなった視点で解決を図ることが求められている。Aさんは、高くはならなかったけど形はいいよねと、友達と振り返っていた。協働と振り返りで大事なことは客観性。一連のPDCAマネジメントは問題解決のサイクルになっていて、大事なプロセスであり、これ自体が能力である。合理的な解決の中で成長実感があつた。これからも合理的な解決のプロセスの価値を確認することが大切。

<授業研究会の受講者の声>

- ・連続で参加した分だけ学びが深まるし、授業や教材の分析も、視点が変わると思います。(N先生)
- ・授業者の単元の作り方が素晴らしかった。実際の授業中には生徒が自ら課題を持って、思考しながら成長する姿が見られた。(H先生)
- ・「PDCAサイクルは子供がまわっているように教員が支援する」を自分の授業で、どう生かすか考えを深めたい。(H先生)
- ・明示的指導が自分は弱いな...と思ったので、明日からより意識していきたいです。(S先生)
- ・合理的な解決を目指すプロセスに沿って授業を組み立てられていたので、能力ベースの授業を具体的にイメージできた。(H先生)



～発行者の徒然なる想い～

子供たちに必要な汎用性の高い能力をどう身につけさせるのか。単元を創るためにどうすればいいのか。授業を終えるたびに悩んでいませんか。学び続けることで、まず「わからないこと」がわかるようになります。「わからない」が見えると、学びがどんどん楽しくなります。何がわかっていないのか、自分自身の「今」に気づくことが大切です。

吹田市立教育センター 文責:川添 TEL 06-6337-5412
能力ベースの授業づくり実践講座 令和4年(2022年)7月

新しい授業づくりの文化を創る

学び続ける教師の軌跡

